

令和3年度 豊かなむらづくり全国表彰事業  
東北ブロック受賞事例の概要

【東北農政局賞】

民を潤しホタルも潤す水を守り抜け 穴堰が導く活性化

○団体名 <sup>みなみはら</sup>南原ホタルの里保全の会（代表 <sup>うえの まさる</sup>上野 勝）

○所在地 <sup>おおさきし</sup>宮城県大崎市

○むらづくりの背景・経緯

江戸時代（370年前）に伊達藩の奥座敷で高台に位置する、南原地区で新田開発を行うため、全長約2kmの南原穴堰が開削された。穴堰は、ほぼ往時の姿を今も残したまま、南原地区に、農業用水・生活用水及び防火用水等を供給、長年にわたり地域住民の水として守られ、人々の生活隅々に根付いてきた。

平成19年に、農地・水・環境保全向上対策の取組開始を契機として、「南原ホタルの里保全の会」を組織し、農地の安定した維持管理活動体制を整備し、用水施設の管理、ホタルの保全等を中心に地域活動を行ってきた。

○むらづくりの内容

（1）農業生産面

南原穴堰の用水は、冷水で作物の生育に影響があるため、先人から受け継がれた巧みな水管理（ぬるめ水路や、ぬるめ田などの温水化）により、水田へ用水を供給している。

このホタルが生息できる清らかな水と、先祖代々の農地と穴堰を頑なに守り抜くことと、環境保全型農業の取組ことで、ここでしか味わえないお米「ゆきむすび」の少量生産、有利販売を行っている。直売所「むすびや」では、「ゆきむすび」などを調理加工しておにぎり定食として提供し、6次産業化を行っている。担い手の確保に当たっては、県内外に一旦出た後継者が就農のため出戻りする動きもあって、生産活動の継続が期待されている。

（2）生活・環境整備面

平成29年に、世界農業遺産「大崎耕土」として、巧みな水管理による水田農業システムが認定されたことで、南原穴堰に対する評価・関心も高まっており、視察の受け入れや、水稻栽培などの農業体験等により、都市住民との交流が活発化している。

南原集落には、6月末から8月のお盆過ぎまで4種類のホタルの舞う、ホタルの里となっており、例年多くの観光客が訪れ、関係人口が増加してきている。

保全の会で行う、春普請や秋普請には他出子も帰省して参加し、作業終了後の直会（たっしゅつし）はコミュニケーションの場となるなど次世代継承の見通しがついている。



環境整備後の保全会スタッフ